

氏名	高島 葉子
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	第 6043号
学位授与年月日	平成 26 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項
学位論文名	山姥とハッグ妖精の比較研究 —日本とブリテン諸島における民間信仰の女神とその源流
論文審査委員	主査教授 三上 雅子 副査教授 村田 正博 副査教授 小田中 章浩 副査 名誉教授 大澤 慶子

論文内容の要旨

本論文は、日本の山姥とブリテン諸島のハッグ妖精を、民俗学、神話学、考古学、民族学の研究成果を援用しつつ比較考察し、両者は民間伝承においては類似した女神的存在であるが、その神格の形成過程は必ずしも同様ではないと論じたものである。山姥とハッグ妖精には、いずれにも「大地の女神／大地母神」原形説が存在するが、本論文では、ハッグ妖精についてはこの説は有効だが、山姥については問題があると指摘した。「大地の女神／大地母神」という概念は、しばしば定義が曖昧なまま使用されてきたことが問題のひとつである。そこで、この概念を、大地（耕地）を女神の身体とみなして母体の生殖力を大地（耕地）の豊饒と結びつけた農耕民特有の観念と定義し、これに基づいて論を進めた。

第一部では、まず、山姥とハッグ妖精の属性の比較検討を行い、いずれも多機能的な「畏怖すべき女神」であると示した。次に、各文化的文脈において、山姥は民間信仰の山の神の一表象であり、ハッグ妖精はケルト語文化圏の女神の系譜であると位置づけた。そして、山の神には二つの神格、山民（狩猟民および山林労働者）の山の神と農耕民（稲作民）の山の神が知られているが、ハッグ妖精もケラッハ型とバンシー型の二つに分類でき、前者と後者の二類型はそれぞれ類似した属性を持つことを確認した。しかしハッグ妖精はいずれの型も土地との強い結びつきを示すが、山の神は遍在性、来臨性がその特徴である。この違いが両者の原形が異なる可能性を示唆していると指摘した。

第二部では、両者の系譜を神話から先史時代まで遡って考察した。ハッグ妖精はアイルランド神話の「国土／領土の女神」を祖先とし、これは新石器時代後期の「大地の女神」につながる。この女神観念はさらに狩猟採集時代の観念を内包すると論じた。山姥／山の女神に関しては、南方の照葉樹林文化と北方のナラ林文化の二つの系譜を想定し、神話伝承資料により確認した。西南日本には中国南西部から焼畑農耕民の信仰や女神観念が縄文時代に流入し、東北日本では、縄文時代以来北方狩猟民の信仰との関連があると示した。そしてこの北の系譜に連なる「野獣の主を兼ねた母性的家神」が山姥／山の女神の最古層にあり、ここに南の系譜が複合したと考えられるが、南の系譜は基盤文化が狩猟を伴う焼畑農耕文化であるため、「大地の女神」の特徴を持たないと論じた。従って、山姥の場合には、その神格の形成過程に「大地の女神」の出現がなく、来臨性という特徴が存続したと結論付けた。

論文審査の結果の要旨

本論文は、民間伝承や芸能において広く親しまれている、日本の妖怪の一種である「山姥」と、ブリテン諸島における「ハッグ妖精」との比較研究である。

山姥についてはすでに多くの先行研究が存在するが、それらはいずれも山姥を山の神の一表象としたうえで、地母神、大地母神、豊穰の神と捉える点において共通しており、山姥を土地と強い結びつきを持つ超自然の存在とみなすことが定説となっている。

本論文は、そのような山姥像に対して、同じく「畏怖すべき女神」として山姥と多くの共通性を有し、かつ先行研究の豊富な蓄積を通じて「大地の女神」という解釈が定着しているブリテン諸島のハッグ妖精を対置することによって、先行の山姥研究に新たな視点を付与せんと企図した論考である。

論文の前半（第一部）においては、豊富な文献資料によって両者の多様な性格と属性の比較検討が行われ、山姥もハッグ妖精も民間伝承においては極めて似た性格、機能を持ち、領有神、狩猟神、農産

神、天候神、家の神、産育神、福の神など、様々な神格を有するが、いずれも「畏怖すべき女神」という共通の性格を持っていることが示される。後半（第二部）においては両者の祖型を神話学、考古学、民俗学の成果を援用して検討し、両者は民間伝承においては極めて類似した存在であるが、その祖型は異なることが指摘される。

ハッグ妖精の場合は、直接の祖先はアイルランド神話における「国土／領土の女神」であり、これはさらに「大地の女神」の系譜にまでにさかのぼりうる。一方、山姥の場合には、特定の土地とのつながりを持たない、依り代があればいかなる場所にも来臨可能な遍在神がその本質であると結論付けられる。

この違いには、ハッグ妖精の直接の祖先が古代アイルランドの「国土／領土の女神」であること、およびこれがさらに「大地の女神」に繋がることとが関係する。「国土／領土の女神」とは、女神自身である土地／大地が聖婚によって王位についた者の領土となるという古代アイルランドの観念が神話的表徴として表れたものである。アイルランドの女神が領土、国土という観念と切り離すことができないのは、そのためである。しかし、日本の山の女神の場合には具体的な領土や国土という概念との結びつきが見られないと論者は述べる。「国土／領土の女神」という概念は、おそらくは汎ヨーロッパ的な「大地の女神」あるいは「地母神」から発展したものであり、日本の山姥／山の女神には、この「大地の女神」、「地母神」という神格が欠けていると見られるのである。日本では「国土の化身」、土地の領有概念の化身としての女神観念は生まれなかった。山の耕作地は山を領有する山の神から借り受けるものであり、耕地そのものは山の神とは考えられてはいない、山中に遍在する神が耕作期間中に来臨して加護するとされているだけである、その点において地母神、大地母神という概念だけでは、民間伝承などに表わされている山の神/山姥の多様性を捉えることはできないと論者は結論づける。

本論文は、多くの文献資料を渉猟しつつ、国土の神、大地の神としての属性が明確に指摘されうるハッグ妖精を山姥に対置するという方法を取ることによって、従来もっぱら土地との結びつきを持つ大地母神としての性格を与えられてきた山姥に対して、遍在神、来臨する神としての山の神という新たな視点を提示することに成功しており、単なる比較研究にとどまらない意欲的な労作である。

資料の取り扱い、仮説の提示に一層の厳密さ・慎重さが望まれる部分も残るが、先行研究の欠落を埋め、今後の研究の発展に寄与するところの大きい刺激的で意義ある論考と評価することができる。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値すると認められる。